

に関連した溝ではなく、集落の一部あるいは個人の土地区画といった簡便な用途を果たすものと思われる。

対して西側の谷を隔てた肥前国寄りの地域や、台地より南の低地部分では、灌漑技術の進展等によりこの時期から土地利用が活発になるようである。福童東内畑遺跡のように、近世集落の様相を示す遺構・遺物が見られる遺跡も調査されている。これまでの市内の近世遺跡といえば、街道沿いの松崎宿周辺が中心であったが、今後は市域南西部をはじめとする農村集落の調査にも着目していく必要があるだろう。

<その他の遺構>

これまで延べてきたもの以外に、寺福童遺跡3～寺福童遺跡4～寺福童遺跡1の流れで落とし穴状遺構が確認されている。各遺跡間に距離があり、必ずしも列状の並びが確認出来る訳ではないが、寺福童遺跡3・4は台地の東端、寺福童遺跡1は南端に位置しており、傾斜部分に走る獣道に沿って構築された可能性が考えられる。

これまで追ってきた集落・墓域の変遷を眺めると、調査事例の数によるものもあるだろうが、台地西部では全く遺構が認められない状況に気付くだろう。寺福童遺跡2では近世以降の溝状遺構が2条確認されているだけで、東部の集落・墓域との関連を伺わせる遺構・遺物は皆無に等しい。

寺福童遺跡4の所在する台地の西側は、谷部に降りてすぐの位置から現在の西福童区となる。この地区は近年道路改良工事に伴ってさかんに発掘調査が実施され、多くの資料が出土している場所である。しかし文献資料から見られる範囲では近世前半、調査成果から推測される範囲ではそれよりもかなり以前から、たびたび水害に悩まされてきた地区でもある。当然のことながら集落形成に適した微高地の範囲も狭く、何より集落に居住した人びとの口を養うための生産性も低い状況であったと想像出来る。自然流路や河川の水流を広範囲の農業生産へ活用する技術が一般的に確立されるまでは、段丘や台地間の谷部は水田耕作適正地として近接集落の生産域となる傾向が長く認められる。集落およびそれと一連の関係を持つ墓域の形成は、地理的な制約はもちろんのことであるが、生産域の確保についても同様に規制されるのかもしれない。

本遺跡の調査は、発掘調査開始からほどなく銅戈埋納遺構が確認され、遺跡全体の調査はこの埋納遺構を中心に実施することとなった。その結果として、他遺構の調査については遺物出土状況や遺構の性格決定、他遺跡との関係性の検討など、現地調査において分析不良の部分を多く残している。埋蔵文化財の調査とは遺跡の破壊にほかならず、1度掘削した遺構は二度と元には戻らない。この調査における反省を、今後の調査における大きな課題としたい。

(2) 銅戈埋納遺構の特質―他の埋納例との比較から―

寺福童遺跡4で検出した銅戈埋納遺構は、青銅器が多量埋納された状況を検出し、その埋納方法を発掘調査の手法を用いて捉えることができた点で特筆に値する。ここでは、既往の埋納例との比較から、寺福童例の特質の描出を試みる。

(i) 寺福童例の概要

- まず、寺福童例の概要を確認しておく(小郡市教育委員会2006)。
- ・長軸約60cm・短軸約18cm以上・検出面からの深さ12～15、の不整長方形で、西側を後世の土坑に切られる。
- ・南側底面に人為的な掘り込みがあって青銅器の破片を含み、埋納土坑内に先後関係が存在する可能性がある。
- ・計9本の中広形銅戈が、東側の7本が鋒を南西に、西側の2本が北東に向けて埋納されており、本来は西側により多くの銅戈が埋納されていた可能性がある。
- ・1～3号銅戈・4～7号銅戈・8～9号銅戈が各1単位のまとまりとして認められ、単位間には若干広めの隙間がある。銅戈は援を地山に接し、胡を地山に差し込んでおり、埋納のための容器を想定することは困難である。また、1～3号銅戈は粘土で固定された形跡がある。

(ii) 北部九州（壱岐・対馬を除く）における他の埋納例

九州の埋納青銅器については、戸塚洋輔氏の集成がある(戸塚2002)。本節ではこれを基に、北部九州の青銅器埋納遺構について、寺福童例と比較していく。なお、紙幅の関係上、比較対象を北部九州の中でも九州本島部に限ることを了解されたい。

1. 発掘調査によって出土したもの

いずれも集落内埋納で、1～2本と少ない。

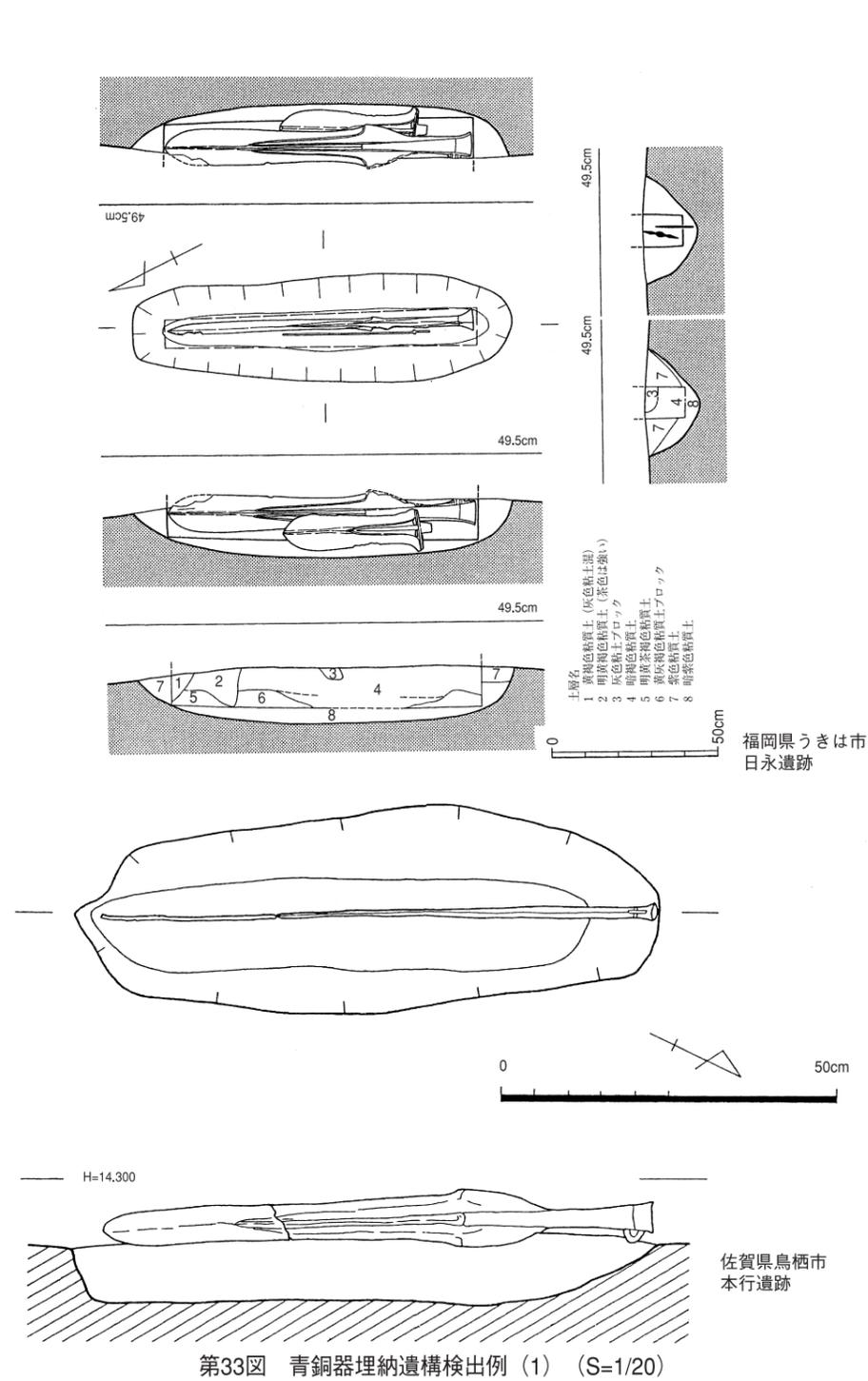
1) 福岡県うきは市浮羽日永遺跡(福岡県教委1993・1994、佐々木1997)

長軸109cm・短軸30cm・検出面からの深さ16cmで、長楕円形を呈する。広形銅矛と広形銅戈を一口ずつ、「鋒そろえ」⁽¹⁾で埋納する。土層断面から、長軸89cm・幅9cm・深さ12cm以上の木箱に納められ、木箱と遺構壁面の間には暗紫色粘質土を充填し、木箱内では銅戈に対して黄灰褐色粘質土で支え状の措置を講じたと思定されている。なお、複数回埋納の可能性については言及されておらず、土層断面にも明瞭な掘り返し痕跡は認められない⁽²⁾。本例は、木箱を用いたことが明瞭な点において寺福童例と大きく異なるが、木箱内で銅戈を支持するために粘土を置く点は、寺福童例の1～3号銅戈を粘土で固定した状況に通じるものがある。

2) 福岡県北九州市重留遺跡第2地点(北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1999)

1号竪穴住居の南壁に沿って銅矛の埋納遺構が設けられている。土層観察から、重複して7回の埋納行為が想定されており、埋納土坑1～7と称される。切り合いが激しく、個々の遺構規模の確定は困難であるが、埋納土坑1が長軸123cm・幅43cm、埋納土坑5が長軸100cm前後・幅30cm前後、埋納土坑7が長軸100cm前後・幅22cm前後に復元される。

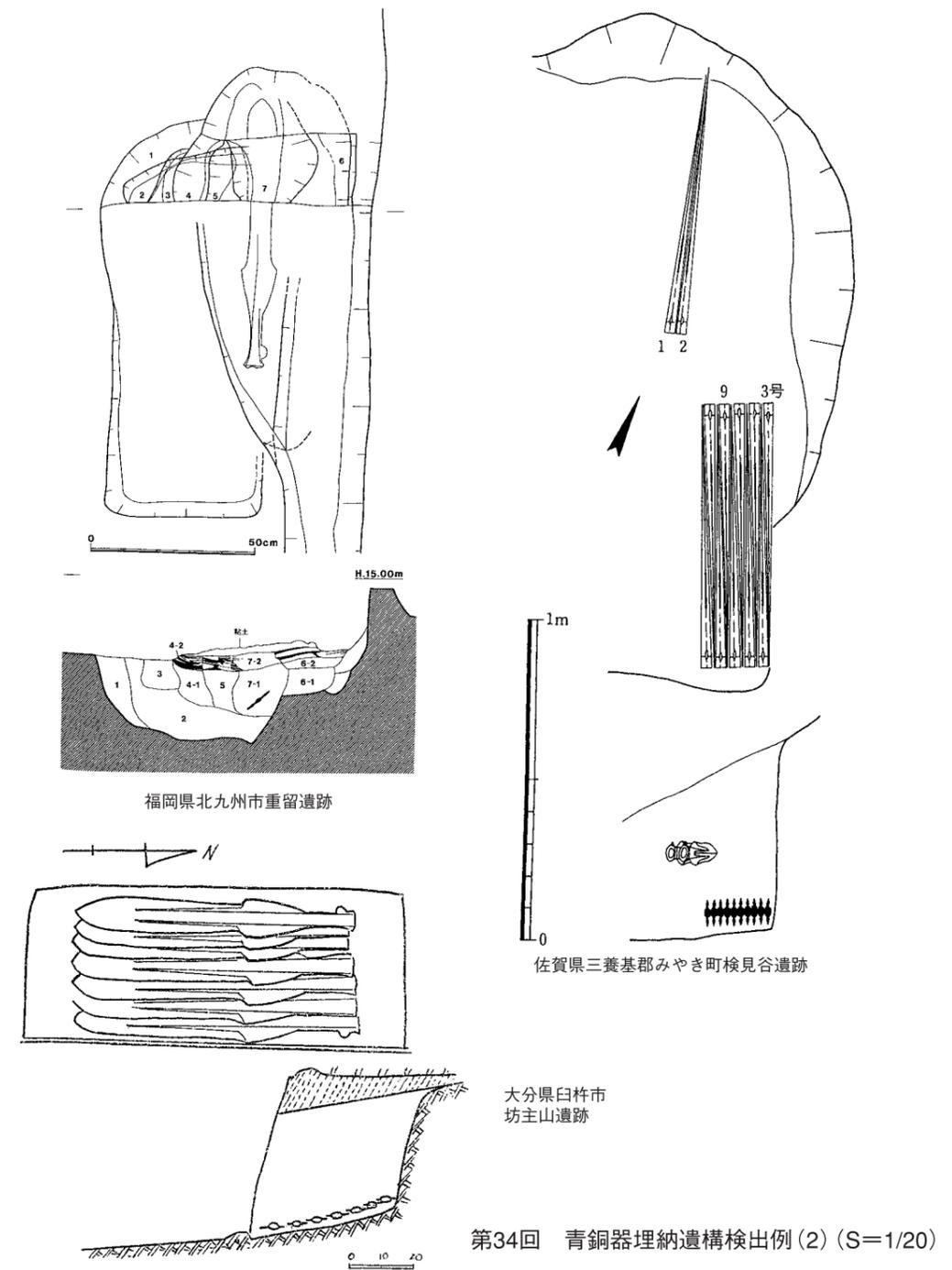
遺構内には、最終埋納坑である埋納土坑7の中に、広形銅矛1本が刃を45度に傾けて埋納されていた。埋土や銅矛表面の状況から、容器や巻き布などのない直接埋納が推定されているが、銅矛は床面から浮いた状態で出土している。遺構の上には白色粘土が厚さ2～7.5cmで置かれていた。



本例は、竪穴住居内の埋納施設である点と、銅矛が刃を傾けて埋納されている点が特異である⁽³⁾。銅矛が底面から浮いている点や、銅矛を支持する粘土等が認められない点は本行例に通じ、寺福童例とは異なる。

3) 佐賀県鳥栖市本行遺跡 (鳥栖市教育委員会1997)

長軸87cm・短軸30cm・検出面からの深さ10cmの長楕円形の土坑内に、中広形銅戈1本を埋納する。銅戈の周囲は黒色炭化物に近い土壌で、調査者は木箱による埋納を想定している。しかし、黒色土のみでは木箱想定の本拠としては弱く、木箱の有無は不明としておきたい。また、複数回埋納の形跡も



確認されていない。

銅矛は埋納遺構底面から浮いている。このことが、断面で見分けられない掘り返しによるのか、容器の存在によるのかは不明だが、寺福童例のように地山に直に接する状況とは異なる。

4) 佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区(佐賀県教育委員会1994)

SD1122の埋没途中に掘り込まれたと見られる長軸48cm・短軸24cm・検出面からの深さ20cmの平面楕円形の土坑内に、中広形銅戈1口が刃を水平に埋納されていた。容器等の痕跡は未確認である。本例は、刃を水平にして埋納する点が特異であるが、正報告未刊のため、今後解釈の変更がありうる。

なお、吉野ヶ里遺跡においては、大曲一の坪地区において銅鐸の埋納遺構が検出されている (佐賀県教育委員会2002)。埋没谷内に掘り込まれ、周囲の土と埋土が酷似して遺構の検出は困難を極めた

ようだが、直径0.3m・検出面からの深さ0.26mに復元されている。銅鐸は倒立状態で埋納されていた。

2.不時発見によるもので埋納状況がある程度わかるもの

不時発見による埋納青銅器のうち本論で扱う範囲内で、埋納遺構や埋納状態に関する情報がある程度提示されているものは、管見の限りでは18例ある。紙幅の都合上一覧表にして提示し、詳しい検討は (iii) で行なう。

地名	器種・数量	埋納坑規模 (m)形状	埋納状態	備考	文献
熊本・山鹿市　　今古閑	中細形銅矛4		「鋒そろえ」		田辺1959
福岡・春日市　　小倉西方	中広形銅矛10	1×0.4×0.3直方体	不明	埋土は黒灰色土	渡辺・小田・松岡1961
福岡・うきは市　　弦掛	中広形銅矛3		3口重なる		高橋1925
佐賀・みやき町　　検見谷	中広形銅矛12		「うちちがえ」10本、「鋒そろえ」2本 ⁽¹⁾		北茂安町教委1986
福岡・うきは市　　徳丸堂の前	中広形銅矛2		2口重なる		高橋1925
大分・宇佐市　　鳥越切寄	中広形銅矛2		「うちちがえ」		安心院町教委1984
福岡・春日市　　岡本辻	広形銅矛9		「うちちがえ」		中山1922
福岡・北九州市　　上長野冷水	広形銅矛2		「鋒そろえ」		小田1976
福岡・那珂川町　　安徳原田	広形銅矛12		「うちちがえ」		中山1930
大分・臼杵市　　坊主山	広形銅矛7	1.2×0.8×0.8	「鋒そろえ」?	刃を水平に置く	賀川1953
福岡・筑前町　　三並ヒエデ	中細形銅戈17		一部「うちちがえ」、一部「鋒そろえ」? ⁽⁵⁾	土器に納める?(内側に錆シミ)	伊崎1999
福岡・筑紫野市　　隈・西小田7	中細形銅戈23		「うちちがえ」?	近くに鉢と円筒形土器を埋納	筑紫野市教委1993
福岡・小郡市　　大板井	中細形銅戈7			合口甕棺内?	福岡県高校教組1950
福岡・春日市　　原町三丁目	中細・中広形銅戈48		「うちちがえ」 ⁽⁶⁾		西谷1969
福岡・小郡市　　乙隈東畑	中広形銅戈2		銅戈の軸線上に一直線に並べる	刃を水平に置く	井上・柴田・渡辺1962
福岡・糸田町　　古賀ノ峯	中広形銅戈6		「鋒そろえ」?		糸田町教委1998
福岡・飯塚市　　綱分八幡宮	中広形銅戈3			土器に納める?	森貞次郎1942
福岡・糸田町　　宮山	中広～広形銅戈9			素焼きの楕円形の壺に納める?	九州歴史資料館1980

第3表　北部九州（壱岐・対馬を除く）における不時発見埋納青銅器一覧(実態不明なものを除く)

(iii) 寺福童例と北部九州諸例との比較検討

(ii) で触れた北部九州の武器形青銅器埋納諸例との比較から、本埋納遺構の特色を抽出してみよう。

まず、容器の有無について、これまでに容器の使用が想定された例は数例ある。日永例と本行例では木箱が、筑前町三並ヒエデ・糸田町宮山・飯塚市綱分八幡宮境内・小郡市大板井・筑紫野市隈・西小田の各例では土器の使用が想定されている。このうち三並ヒエデ例は容器と想定される土器が現存しており、その内面に青銅錆の染み付きが見られる（伊崎1999）ことから、土器に入れて埋納していた蓋然性はより高い。木箱の痕跡は日永例において明瞭であり、現状で容器の使用を確認できるのは三並ヒエデ例及び日永例のみとして良い。

他の例を見ると、不時発見によるものは、容器の使用が想定されているものを含めて、今となっては容器の有無を確認する術がない。発掘調査によるものを見ても、日永例以外ではいずれも青銅器は遺構底面から浮いて出土している。重留例では遺構埋土等から直接土中埋納が推定されているが、青

銅器が遺構底面直上に密着して出土するなど容器の使用が全く考えられない例は確認されていない。したがって寺福童例は、容器を伴わない直接土中埋納のあり方を考古学的に確認できた、北部九州における初例と言うことが出来る。

1～3号銅戈に見られるような青銅器を固定する粘土など、埋納青銅器を支持するような措置は、日永例のみに類例を求めることが出来る。寺福童例とともに筑後地方に位置する遺跡である点は興味深い。

次に銅戈の並べ方について検討する。寺福童例では (i) でのべたとおり、東側の7本が鋒を南西に、西側の2本が北東に向けて埋納されており、埋納遺構が後世の土坑に切られていることから、より多くの銅戈が埋納されていた可能性が考慮されている。武器形青銅器の並べ方については、九州地方において10本前後以上の場合に「うちちがえ」を、2～5本程度の場合には「鋒そろえ」を多く採用する傾向にあることと、現段階では明確な地域性を見出し得ないことが戸塚洋輔氏によって指摘されている（戸塚2002）。これは、埋納時に「鋒そろえ」ではデッドスペースが増えることを考えれば合理的である。器種や時期によって並べ方の傾向が異なる可能性も考えたが、(ii) にあげた諸例からは、中細形銅戈がいずれも土器に納めて埋納されていたとみられることを除けば、器種・型式によって特定の埋納方法が卓越するといった状況は見受けられない。現状では、本数によるもの以外に並べ方の傾向性は見出せないと言ってよい。

寺福童例は9本ないしそれ以上の埋納であることから、「うちちがえ」が採用されていてもおかしくない事例である。ところが実際には「うちちがえ」ではなく、かといって純粋な「鋒そろえ」でもない並べ方で埋納されていた。

純粋な「鋒そろえ」や「うちちがえ」でなく、これらが混在した状態が想定されているものとしては、検見谷例・三並ヒエデ例がある。また、原町三丁目例についても「うちちがえ」と「鋒そろえ」の混在とする意見がある(伊崎1999)。しかしいずれも不時発見であるために、その出土状況の実態は必ずしも詳らかにされてきたとはいえない。

寺福童例では、こうした純粋な「鋒そろえ」「うちちがえ」の並べ方を採らない埋納形態を、発掘調査の手法によって検出することができた⁽⁷⁾。さらに、後世の土坑に切られた側にもう数本の銅戈の存在を想定するならば、その失われた銅戈は西側の2本と同様に鋒を北東に向けていたと考えるのが最も自然である。このように考えてよいとすれば、本来の埋納は鋒を南西に向けて「鋒そろえ」にした7本と、鋒を北東に向けて「鋒そろえ」にした2本以上を同一の列に並べて行われたことになる。こうした並べ方は「鋒そろえ」にした数本ごとの単位を「うちちがえ」に配置した、と表現すべきものであるが、不時発見例からの想定を含めても管見の限りでは他に類例がなく、実際にそうした並べ方が存在したか否かについては類例の増加を待つこととしたい。なお、寺福童例の検出状況は検見谷例・三並ヒエデ例・原町三丁目例に直接適用できるものではなく、純粋な「うちちがえ」「鋒そろえ」以外の並べ方はいくつかのバリエーションがあったことが十分に予想される。

【文註】

(1) 武末純一氏は、青銅器埋納遺構における青銅器の配置方法を、鋒部の方向をそろえて並べる「鋒そろえ」、一本ごとに鋒部の方向を交互に違える「うちちがえ」、鋒部をX字形に組み合わせる「X字型」に分類している(武末1982)。なお、X字型は現状では対馬にしか類例がない(戸塚2002)。

(2) 複数回埋納の痕跡が認められない場合でも、先行する埋納遺構を完全に削平して最終埋納遺構が掘削された、または先行する埋納遺構が調査区外に存在する可能性が存在する以上、一回性の埋納と即断することはできない。よって本稿では、複数回埋納の痕跡が認められるか否かについてのみ言及し、一回性のものか否かには言

及しない。

(3) この傾きが意図的なものか不可抗力的なものかは不明である。

(4) 本例では、うちちがえの一群と鋒そろえの一群がやや離れた状態に復元されている。ただし、うちちがえの一群が圧痕や埋納坑などを根拠に復元されているのに対して、鋒そろえの一群は聞き取りのみを根拠に復元されているうえ埋納坑が確認できないため、本来は12本全てが一括埋納されていた可能性も指摘されている。

(5) 17本発見されたうちの13本は既に散逸しているが、残り4本の銅戈表面に付着した錆の状況から、「うちちがえ」「鋒そろえ」の混在が指摘されている。

(6) 伊崎俊秋氏は、「うちちがえ」と「鋒そろえ」の混在を考えている(伊崎1999)

(7) 島根県出雲神庭荒神谷遺跡では銅剣で「うちちがえ」と「鋒そろえ」が共存しているが、4列に並べられた銅剣のうち2列が「うちちがえ」、2列が「鋒そろえ」となるもので、それぞれの列は純粋な「うちちがえ」ないし「鋒そろえ」で並べられている。検見谷例は一見荒神谷例に近い例であるが、(4) で述べたとおり本来は12本全てが一括埋納されていた可能性も残されており、即断しがたい。

【参考文献】

中山平次郎1922「明治三十二年に於ける須玖岡本発掘物の出土状態(其一)」『考古学雑誌』12・12
 高橋健自1925『銅鉾銅剣の研究』
 中山平次郎1930「新発見の銅鉾」『考古学』1・5・6
 森貞次郎1942「古期弥生式文化における立岩文化期の意義」『古代文化』13・7
 福岡県高等学校教職員組合1950『北九州古文化図鑑 第1輯』
 賀川光夫1953「新たに発見された東九州の銅鉾銅戈」『考古学雑誌』39・2
 田辺哲夫1959「四本の銅鉾を出土した竪穴住居跡 - 肥後植木町轟遺跡 - 」『日本考古学協会第22回総会研究発表要旨』
 渡辺正気・小田富士雄・松岡史1961「福岡県春日町新発見の銅矛」『九州考古学』13
 井上俊男・柴田泰典・渡辺正気1962「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」『九州考古学』14
 佐藤堯1961「大分県北部清水ヶ迫発見の平形銅剣」『九州考古学』11・12
 西谷正1969「九州の銅戈」『月刊文化財』1969・9
 小田富士雄1976「青銅利器と鏡鑑」『北九州の埋蔵文化財』
 七田忠昭1976「文様ある銅矛について - 佐賀県日達原銅矛の紹介を兼ねて - 」『九州考古学』52
 九州歴史資料館1980『青銅の武器』
 武末純一1982「埋納銅矛論」『古文化談叢』9
 安心院町教育委員会1984『宮ノ原遺跡』
 北茂安町教育委員会1986『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第2集
 筑紫野市教育委員会1993『隈・西小田遺跡群』筑紫野市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
 佐々木隆彦1997「日永遺跡出土の銅矛・銅戈」『九州歴史資料館研究論集』22
 鳥栖市教育委員会1997『本行遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第51集
 糸田町教育委員会1998『宮山遺跡(付)古賀ノ峯遺跡出土銅戈』糸田町文化財調査報告書第3集
 伊崎俊秋1999「福岡県夜須町出土の銅戈」『甘木歴史資料館報』1
 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1999『重留遺跡第2地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第230集
 戸塚洋輔2002「(3)九州の埋納青銅器」『吉野ヶ里銅鐸』佐賀県文化財調査報告書第152集
 山崎頼人2006「[2]銅戈取り上げ・遺構内部調査」『寺福童遺跡4 発掘調査概報』小郡市文化財調査報告書第206集
 片岡宏二2006「V.寺福童遺跡銅戈埋納をめぐる諸問題」『寺福童遺跡4 発掘調査概報』小郡市文化財調査報告書第206集



寺福童遺跡4 全景(第2遺構面)